

ある。ただ、どうにもならないと追いつめられた時、投げ出したいと思った時、ぼくはあの夜のことを思い出し、小さな前進を試みるのだと思う。コンゴに来て一瞬一瞬を積み重

ねる内になぜかどうにかなるだろう、そんな楽観もわくようになった。この国がぼくにかけた不思議な魔法だ。

森の秘密会議

—コンゴ民主共和国ワンバ村の調査から—

横 塚 彩*

アフリカ中央部に位置するコンゴ民主共和国。私の調査地は、首都キンシャサからチャーター機で4時間、更に悪路をバイクで走ること3時間のところにあるワンバ村である。私は大型類人猿ボノボとワンバ村の人々の共生関係の成り立ちを調査するため、2014年11月から3ヵ月半フィールドワークを行なった。ワンバ村では民家にホームステイをしていた。

「マダム、これから森にヤシ酒を飲みに行く。一緒に行こう。」そう声をかけてくれたのは、ホームステイ先のお父さん。ホームステイの初日、雑談の中で私がヤシ酒が好きだと言うと、それ以来、手に入る時は、朝食前や、夕食後にヤシ酒を用意してくれていた。

ヤシ酒は、東南アジアや赤道付近のアフリカ地域で飲まれている醸造酒である。私の地



写真1 採取したばかりのヤシ酒

域では主に、アブラヤシやラフィアヤシを切り倒し、その頂部の裁断面から溢れる樹液を集めて発酵させる。ヤシの樹液は白濁色で、取れ立てのヤシ酒は甘みが強く、スポーツ飲料のような味わいだ。樹液を採取した後2～

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

3時間放置すると、糖分の発酵によってアルコールが発生する。更に時間を置くと発酵が進みすぎてしまい、甘みより苦味の強いヤシ酒となる。ワンバの人々もそのようなヤシ酒は「Ezali mabe（これはひどい）」と言って飲もうとしない。ヤシ酒は保存の効かない“時間勝負”のアルコール飲料なのである。

ホームステイ先のお父さんについて森の中を歩くこと約5分。突然開けた場所に出た。そこには、倒されたアブラヤシの樹が1本あり、男性3人がその周辺で草刈りの仕事をしている最中のようなのだ。お父さんが「ヤシ酒を飲むぞ」と男性たちに向かって叫ぶと、彼らはヤシの樹の周辺に集まってきた。皆でヤシを囲むように座ると、お父さんがヤシの樹の裁断面に設置した樽のようなものを取り出した。白濁したヤシ酒には、集まってきた無数のアリが浮いていた。お父さんはプラスチック製のこし器のようなものを使い、私の

コップに取れ立てのヤシ酒を注いでくれた。樽の中を見た時は、大量のアリの姿に少し困惑したが、こしてくれたお陰で虫が混じっていることはなかった。

男性陣は小さな急須のような形をした木製のコップにヤシ酒を入れて回し飲みをしていた。注ぎ口には口をつけずに、自分の口とちょうどいい距離を保ちながら、上手にヤシ酒を飲んでいく。その姿が面白く、笑いながら見ていると「マダムもやってみる？」とお父さんが私にコップを渡してくれた。今まで顔より高い位置から落ちてくる飲み物を飲んだことがなかったので、どれくらいの高さにすればいいか、どれくらい顔から距離をとればいいのか分からず、考えながらやっていたら、コップの先が口に触れてしまい、とても難しかった。

ヤシ酒を回し飲みしながら男性は、おしゃべりを楽しむ。後々考えてみると、朝も昼も暇そうに家の外の椅子に腰掛けているお父さ



写真2 ヤシの樹の裁断面の下に樽のようなものを置き採取する



写真3 回し飲み用のコップで飲む男性。なかなか口に入れるのが難しい！

んの姿が、夕方になると時々見えなくなることがあった。理由を聞くと、「ヤシ酒を飲みに行っていた」と答えることが多かった。コーヒブレイクならぬヤシ酒ブレイクは、女性や子どもが立ち入ることの許されない男性だけの秘密のひとつのように感じられた。

大人の男性だけでなく、小学校高学年くらいまでの男の子たち数人と森へ遊びに行った時にも同じような体験をした。

ボノボのリサーチステーションに滞在していたある日、基地の裏庭を子どもたちが通り過ぎる姿が見えた。そこには、森に通じる道があり、子どもも大人もその道を利用する。「どこへ行くの？」と声をかけると、「畑にキャッサバの葉っぱを取りにいくよ。マダムも一緒に行こうよ」という。その日は調査が休みで予定もなかったので、子どもたちと連れ立って森を歩くことにした。子どもたちは葉っぱや果物や昆虫を指差し、私にその名称や、美味しいかまずいか、ボノボも食べるかなど、色々なことを教えてくれた。私の前を歩いていた裸足の子どもは、段差やつまずきそうな幹があるところを見つけては、「気をつけて」と声をかけてくれた。しばらく歩く



写真 4 子どもたちと森を散歩中

と畑に出たので、ひと休みしようと皆で大木に腰掛けた。すると、子どもたちは、「マダムの国の写真を見せて。キンシャサの写真はある？」と私の携帯電話の写真をせがんだ。私が一枚一枚解説しながら写真を見せると、子どもたちは小さな携帯電話の画面に釘付けになっていた。森から戻る途中もまだ子どもたちは写真に写っていた飛行機や、キンシャサの風景や日本の食事について、たくさんの質問をしてきた。ワンパではなかなか見る機会のない写真の中の世界に興味津々の様子であった。リサーチステーションの前で「もう帰るね」と別れると子どもたちは意外とあっさりと私を基地に帰してくれた。後日、森を散歩した子どもたちを含めた複数の子どもたちが遊んでいる場に出会っても「写真を見せて」と言ってくることはなかった。森での散歩からしばらく経ったある日、リサーチステーションの裏庭で、一緒に森を歩いた少年のひとりに遭遇した。彼は私の顔を見るなり、「マダム、森で見せてくれた写真を見せて。あの時のリンガラミュージックも聞きたい」と、内緒話をするようなトーンで言いな



写真 5 携帯電話の写真に夢中の子どもたち

がら寄ってきた。

私は、この少年がひそひそ声で「森でのおしゃべり」について話してくる姿を見て、「森でのおしゃべり」は、たくさんの人がいる村の中とは異なる特別な状況下で行なわれるものだと感じた。そこには、なにか秘密の共有めいたものがある。

ワンバ村では、住居の裏には森が広がっており、人々は日々の生活の中で、日常的に森での仕事を行なっているのだが、森の中で複数人集まって話をするというのは、「特別感」というか、その場にいる人だけが共有できる秘密の何かがあるように感じた。男性が森の中でヤシ酒を楽しむ時には、決して妻や子どもには聞かれてはいけないこと、子どもが森でおしゃべりをする時には、母親や他の兄弟や友だちには内緒にしたいことを、こっそり

みんなで共有しているようである。多く人々がいる「村」と、自分の近しい人だけで入る「森」という場を、一見境界がないようにみえても、子どもや男性は異なる場として認識しているのではないだろうか。

もちろん女性も、女性同士の会話を、男性や子どものいない時、たとえば畑や森での採集活動、水汲みや洗濯の時などに楽しんでいるのだろう。

こうして時々秘密の会議に招き入れられると、ワンバの人に受け入れられたような気持ちになり、内心少し嬉しい。子どもや男性の日々の生活の中にも、私の調査のヒントは潜んでいるのではと思う。今後も「森に行こうよ」と言われたら、二つ返事で同行させてもらい、秘密会議に出席させてもらいたいと思う。

カンボン 失われつつある居住地とそこに生きる人々

水 野 久仁香 *

市街地へ向かうバイクや車がひっきりなしに行き交うスディルマン通りの橋の上から、下を見下ろせば川沿いに広がる家、家、家…

インドネシア語で谷 (lembah) といわれる、ジョグジャカルタの町に流れるチョデ川

の斜面。そこにある居住地を初めて訪れたのは、もう3年前のことだ。2012年4月、私はジョグジャカルタにあるガジャマダ大学の先生に連れられてやって来た。居住地の入り口を示すガプラ (gapura) という門をくぐ

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科